



す

でに本通信のウェブ版ではお知らせしているのだが、高尾小学校の落語活動が、昨秋の博覧賞に続いてパナソニック教育財団の「子どもたちのころを育む活動」全国大賞を受賞した。全国から応募された二百件近くの活動の中から最高賞に選ばれた。先日、用あつて奥出雲町を訪ねたら町の広報が目にとまった。定式幕に丸抜きで高尾小の児童五人が表紙を飾っていた。めくると見開き二ページの特集記事になつていて、町長さんも「人口減少に総力戦で立ち向かう奥出雲町創生だ」と受賞を言祝ぐメッセージを寄せてくださった。落語と手厚い複式教育を求めて留学生を呼べやしないかと夢想していたことを思い出す。果たせなかったのだが。

去年、にこにこ寄席担当のK教諭から二つの賞に応募すると聞いたとき、K教諭の興を殺いではないかと思ひ黙っていたのだが、ぼくはパナソニックの成り行きの方が気になつていった。というのも、賞を主催するフォーラムの座長が哲学者の鷲田清一氏で、氏の『「聴く」ことの力ー臨床哲学試論ー』（ちくま学芸文庫）が愛読書だったからだ。植田正治の写真もこの本で知った。氏の朝日新聞一面のコラム「折々のことば」も毎朝真つ先に読む。さらに、座員には島根県縁の経済学者玄田有史氏も名を連ねる。昔読んだ『14才

からの仕事道』（イーストプレス）はずいぶん教室で受け売りさせてもらった。両氏がどれだけ関わられるのかわからないが、少なくとも最終審査に残つたレポートには目を通されるだろうから、「高尾小学校にこにこ寄席」を両氏にこそ見てもらいたい。K教諭の苦勞をよそにそんなことを思っていた。

鷲田清一氏が授賞式で語られたスピーチをホームページで読むことができる。氏は、教育は本質的に「お節介」な行為だという。それゆえ押しつけか、手を出さないかの間で揺れる。その塩梅が極めて難しい、と。「その場にいる子どもたちが勝手に育つ場づくり」が大切なのだと思います。」至言だ。

落語を始めた頃を思い返すと、どうひいき目に見ても押しつけがましい方のお節介だった。ある活動を始めようと思えば、おそろくそれは避けて通れない。押しつけは必然的に様々な困惑や混乱を作り出すのだけど、止めたくなければ一つ一つ対処していくほかない。そうして一年、また一年と重ねていった。十年経つてみたら、鷲田氏に「子どもたちが勝手に育つ場」の例として取り上げてもらえるものになつていった。お節介をおもしろがる人たちが場を大切に育み続けた結果だ。今にして思うのだが、それは決して簡単ではない。むしろ極めて希有なことなのだ。

木幡智恵美 木幡智恵美

コロナ感染 (5)

息子が自宅待機解除になつて出勤した日、また熱が上がり出した。咳も増え、変わらぬ濃い痰が出る。ウイルス感染が長引いて息子にうつす可能性があるのではないかと心配になり、保健所に相談の電話をする。国の指針によると、十日経つと感染させる危険性は無くなること、症状が緩和しないのならかかりつけ医で受診し、その際は陽性で自宅待機をしていたことを話すようにと言われた。

翌十七日、やはり熱は下がらない。かかりつけ医に、コロナに感染して自宅待機が解除されたけど、症状がよくならないと電話で伝える。症状や処方された薬を聞かれ、少し強めの薬を出すとのこと、本人ではない者に処方箋を取りに来てもらうよう言われる。その日は夫が退院する日なので、入院先の病院に迎えに行き、その帰り、かかりつけ医に寄つて、夫に処方箋を取りに行つてもらった。隣の薬局で一週間分の薬をもらったので、これで症状は治まってくれるだろう。

夫は、一部屋に押し込められた窮屈な暮らしから解放され、いつになくよく動いている。キュウリの苗の移植をしたり、買い出しに行つたり。自由に動けることが楽しくてたまらない様子だ。私はというと、微熱がやはり続き、咳も痰も治まらない。身体もだるく、このところ、毎日昼寝をしている。息子のウイルスによる風邪様の症状なのか、新型コロナウイルス感染症の後遺症なのか分からない。

その夜、十日振りに家族三人揃つての夕食を摂った。夫が買って来た刺身をネタに、手巻き寿司にしたのだ。よほど退屈だったのだろう、食後、夫が息子にせがんで将棋の相手をしてもらっている。私は早々に床に就いた。

入院までした夫は無症状なのに、私の場合、薬が切れると、微熱、咳、痰がぶり返し、感染後ひと月経つてもぐずぐずし通しで、かかりつけ医に再度薬を処方してもらいに行つた。かなりの割合で、コロナの後遺症に苦しむ人がいると聞く。あれがコロナによるものだったのかどうか分からないが、ひと月余りで治まったのは楽な方だったのかも知れない。

30代フリーター やあ、ジイさん。後期高齢者2年目に入った気分はどうだい。

年金生活者 年寄りの生活はアスリートの毎日に似たところがあると感じる。高齢でない人たちが、自分の持つフィジカルな力のうち6割くらいを使って普段の生活をしているとすれば、高齢者は8割くらいを使っていると暮らしている。同じことがアスリートにも言えるはずだ。

6割とか8割という数字に根拠はないが、わかりやすくするためにこれを使うことにする。高齢者が持てる力の8割を使うのは、力の総量が減っているからだ。アスリートは力の総量は平均より多いが、トレーニングの必要から6割では足りず8割を使う。

両者の違いは、高齢者が生活全般に渡って8割の力を使うのに対し、アスリートはトレーニング時に集中的にそうしていることだ。アスリートの日常生活での力の使い方は一般の人たちと大差ないだろう。だが、高齢者は過去

には6割の力を使うだけで済んでいた日常の行動に8割の力を使うことを強いられる。

30代 アスリートになぞらえるとはあつかましい、と言われそうだな。

年金 かつて習慣として、なかば無意識のうちにこなしていた動作を、意識的にしないとできなくなるのが、年を取るということだ。たとえば、立ち上がるとき「よっこらしよ」と声を出してしまうのは、そのあらわれと言っている。感動詞に近いその言葉は感情の表出であり、かつて無感情でできていた動作が、感情の動員なしにはできなくなったことを意味する。

実際、以前ならささいに見えていたことにも敏感になり、1日の感情の振幅が大きくなっているのを実感する。否応なく、それを調節することを強いられる。意識して力を使う場面の多いアスリートにとつて、メンタルの調整が欠かせないように。

30代 年を取ると人間が丸くなる、と昔から言われているけどな。

怖いのは、生きるのが怖いからではないかとも思えてくる。

なぜ生きることが怖いのか。生き始めるときに人間が真っ先に襲われる感情が恐怖だからだ。母胎の楽園を追われ、この世界の荒野に生まれ落ちたときの衝撃がその恐怖をもたらす。生きることとはその衝撃の反復として経験される。

生きることの基本を自然に遭遇し、

年金 快感であるはずの食事や排便や睡眠が次第に労働のように感じられてくるのも老いの特徴だ。睡眠にも体力が要るとされている。それが衰え、眠りが浅くなる。それに比例するように生々しい夢を見るようになる。深く眠れば忘れるはずの夢を覚醒後も覚えているせいだろう。夢を睡眠の中に閉じこめておく力が身体から失われ、夢が睡眠の外に漏れ出すようになると言ってもいい。

身体を知覚や運動を担う体壁系と、不随意に動き続ける内臓系に分けて考えると、睡眠とは前者が休止し、後者だけが動いている状態ということができる。吉本隆明は解剖学者の三木成夫の考えをもとに、感情の源泉は内臓系にあると考えた。だとすれば、感情は睡眠中も休むことなく動き続けているはずで、それが夢を形成すると考えることができる。その間、体壁系の知覚や随意の運動は停止しているの、外部の環境からの情報の入力はなくなくなる。夢が荒唐無稽になったり、リアルさを欠いたりするのはそのためだ。

他者に遭遇することだとすれば、前者は荒野に放り出された経験の反復であり、後者は自分を庇護してくれる母との再会の反復ととらえることができる。前者だけなら、人間は生きたくない。後者があるから、生きようと思ひ直す。

生誕が母胎の楽園を追われることだとすれば、その楽園への帰還は生涯消えることのない願望になるはずだ。それは生まれる以前に戻ることだから、その意味で生の否定であり、死を意味する。だとしたら、死ぬことは怖いことどころか、快樂のはずだ。

しかし、一度楽園を追われた者にとつては、そこに帰ることは快樂だけをともなう経験とは感じられなくなる。楽園は母に属し、その母はわが子をそこから追い出した恐ろしい存在でもあるからだ。そのもとへ帰ることは帰郷の喜びを予感させる一方で、怖い母を思い起こさせる。死が恐怖と甘美さの両方を感じさせる理由がそこにある。

30代 年を取ると、死についての感じ方も変わるのか。

年金 死ぬことよりも生きることのほうが怖い、とだれかが言っていたのを思い出した。もしかしたら、死ぬのが

ニュース日記 869
中村 礼治

老いをめぐって